



段階的に車線減少と歩道拡幅を行い、人と公共交通優先の空間に生まれ変わる構想。

変わる三宮のまち 30年後の実現を見据えた大構想

神戸市は、2015年に「神戸の都心の未来の姿 -将来のビジョン- 」と「三宮周辺地区の再整備基本構想」を併せて策定した。国際色豊かな港町・神戸をさらに魅力的なまちへと進化させるべく、30年後の実現を見据えて今年も数々のプロジェクトが始動している。

再整備の背景の一つは、兵庫県ならびに神戸市の人口減少問題がある。大学卒業後、大阪や東京に移動する人が多く、若者人口が激減している(31ページ年齢別グラフ)。若者層を取り戻すためには、若者に選ばれる魅力あるまちづくりが必要だ。今後は新事業への投資を行い、まちのにぎわい創出や企業の誘致、起業の促進にも取り組むとしている

活性化のリーディングエリアは、神戸市の玄関口である三宮周辺地区。再整備基本構想では、「三宮にある6駅の乗換動線が分かりにくい」「イベントをしたり、

人が憩うための空間が少ない」「神戸を発展させる産業が少ない」などの課題が洗い出された。市は、新しい駅前空間の創出や人が集まり交流する場の提供など、複数の施策で課題をクリアし、「人」を中心とする活気あふれるまちづくりを行っていく予定だ。



現在、車中心の三宮中心部だがそれを外周道路に誘導し、新たな交通手段の導入など交通体系を見直す方針。

歩く人が楽しめる 巡りたくなるまちへ

歩行者、自転車、自動車が行き交う三宮駅周辺道路は、歩く人が中心の道路空間へリデザインする方針だ。先行的な取り組みとして、昨年11月に真谷南54号線の一部で歩道の拡幅を実施。2車線を1車線に減少させ、歩道の拡幅部にはベンチが並ぶ憩いの場として生まれ変わった。今後も拡幅範囲を延伸する予定。また、駅周辺に分散している中・長距離バスの乗降所を集約し、利用者に分かりやすい新

バスターミナルを整備する。2017年度中に事業手法を検討し、2020年度中の工事開始を目指している。人が交流する場の創出のため、社会実験も行われている。昨年6月には東遊園地のリノベーションを、10月には三宮中央通りの停車帯を利用してウッドデッキが並ぶパークレットを設置。今後、検証結果をもとに計画を決定する。「都心である三宮が魅力的なまちへと生まれ変われば、企業や人が集まる。働く環境やリフレッシュ空間など居心地のよいまちにこれから変わっていくので期待してほしい」と市の担当者は話す。

芦屋のシェフが伊料理で優勝 関西勢初の快挙

芦屋のイタリア料理店「ポッテガブルー」のオーナーシェフ大島隆司さんが、昨年11月在日イタリア商工会議所が開催する料理コンクールに初出場し優勝した。このコンクールは、日本のイタリア料理界を担う新しい料理人の発掘などを目的に7年前から毎年開催され、関西のシェフが優勝したのは今回初という。書類審査などを経て30名のうち8名が東京での実技審査に挑み、50分間で22名分の前菜とパスタ、計二品を作り上げた。

大島さんは、イタリアの5都市で約3年修行を積み、7年前芦屋で開業した。オープン当時から兵庫県産の食材を使用し、添

審査員のうちジャーナリストが選ぶ「ジャーナリスト賞」も獲得し、ダブル受賞となった。



加物を使わずソースもすべて手づくりにこだわってきた。今回のコンクールでも、淡路産のニラや灘の酒といった地元食材で「神戸をアピールしたい、神戸からイタリアンをもっと盛り上げたいという気持ちで臨んだ」という。「自分がコンクールに出たことで、スタッフの刺激になれば」と今後は後進の育成にも力を注ぎたいと話す。受賞した二品は、日ごろ店で提供している料理のため、ランチやディナーで食べられる。



優勝したメニュー、パスタ「ペストジャポネーゼ・コン・モツツアレ」は、通常パスタをベースにするジェノパソースをニラでアレンジ。濃厚だがニラ臭はなく、爽やかな後味。



前菜「甘鯛のクロッカント 日本酒香るソース」の甘鯛は淡路産、日本酒はノーベル賞晩餐会でふるまわれた灘の「福寿」を使用。旬のほうぎきやエディブルフラワーで彩りを添えた。



審査員長は、イタリアのグルメガイドブック「Il Golosario」の創設者で、本国で著名な食文化ジャーナリストでもあるバオロ・マッソプリオ氏(写真左)。そのほか本場イタリアのシェフや東京の「アクアパッツァ」のオーナーシェフ日高良実氏、食雑誌の副編集長などが揃い、盛り付けや味、創造性などを評価した。

神戸の学生ファッションショー開催 比で「貧困の子どもたちに夢を」

神戸女学院大学や関西学院大学を中心とした学生25名が、貧困地域に住む子どもたちが体験を通して新しい自分を見つけ、夢を描きかけを作りたいと、フィリピンでファッションショーの企画運営をしている。「DEAR ME」と題して2015年8月から始まり、今年2月に4回目を開催した。代表の西側愛弓さん(神戸女学院大学4年生)はもともと洋服が好きで、ストリートファッションの写真を撮るため学校が休暇のたび海外に出ていた。あるとき、ボロボロの服を着た貧しい子どもたちを目の当たりにし、何か支援をしたいと思い始める。みんなで一緒に作り上げるもののがいいとショーを思いつき、大学の友人と企画を立てた。初回は資金もコネも、実績もないため、サ

今回はフィリピン大学で25名の子どもたちがモデルウォーキング。運営資金調達のためクラウドファンディングにも挑戦し、30日間で目標金額28万円を達成させた。



ンプル品の洋服提供を依頼した企業からは「夢物語だ」「叶わない夢を見させてもかわいそうだ」などと、相手にされなかったという。開催2週間前になっても服がなく、一時は開催が危ぶまれる状況に。しかし、想いは通じるはずと粘り強く交渉し続け、企業の協力を得て実現にこぎつけた。回を重ねるごとに「子どもたちがそれぞれ夢に向かって努力できる環境づくりをしたい」と新たな思いも出てきた。実現のために西側さんは「思いついたアイデアは失敗をしても挑戦していく」と話す。



子どもたちが自分の夢を紙に書き、虹の形に貼った「ドリームペーパー」。ある12歳の少女はタガログ語しか話せなかったが、今回英語で話しかけてくれたという。「人見知りだったけれど、前回ショーに出たことがきっかけで、フライトアテンダントになって日本に行きたい、という夢ができた。そのために英語を勉強している」。



西側さんは、「フィリピンだけではなく世界でも展開したい。貧困についてもっと知ることが必要だと思っています」。

地域ぐるみで子どもを 非行と犯罪から守ろう

協力:兵庫県警察



春は、進学・進級や就職等で、子どもたちが希望と期待に胸を膨らませる時期である反面、生活環境が大きく変わり、飲酒、喫煙、家出などの不良行為や万引き、薬物乱用などの非行に走りやすい時期でもある。また、携帯電話、スマートフォンを持ち始める時期でもあり、コミュニティサイトや無料通話アプリ等を利用し、児童ポルノ児童買春などの被害者となる事件も後を絶たない。

社会で子どもを見守る気運を高める

- 地域全体で日頃から厳しくも温かい目で子どもを見守り、時には、周りの大人が「悪いことは悪い」ときちんと注意する。
- 子どもの出す「危険なシグナル」を見逃すことなく、子どもに対して、常に身の回りに自分のことを気にかけている「大人の目」があることを伝える。

少年を有害な環境から守る

- 子どもたち自身が日常生活で正しく判断し、自ら非行や被害を回避して行動できるよう、少年自身のハートスキル(心の能力)の向上を図る。
- 子どもたちが携帯電話やパソコンをどのように使っているかについて、保護者が関心を持って確かめる。

- 違法・有害な情報の危険性を教える
- ～ブログなどに自分の個人情報を書き込まない
- ～出会い系サイトなどを利用しない、ネットで知り合った人と絶対に会わない
- ～見知らぬ人はもちろん、たとえ知人や友人であっても裸の写真や絶対にはやらない
- ～薬物、家出、自殺サイトなど、有害な情報を絶対に閲覧させない
- ～フィルタリングサービスを利用する

少年相談室「ヤングトーク」

兵庫県警察本部少年育成課では、専門員による相談電話「ヤングトーク」を開設している。
無料ダイヤル 悩んだら トーク
少年相談室「ヤングトーク」 ☎0120-786-109
(9:00～17:30受付夜間、土日祝祭日は留守番電話にて対応)
さーらい 悩みファックス
FAX (078)351-7829